

地域と大学の連携を継続的なものにするために

洲本市 元・地域おこし協力隊

藤田 美沙子

感じている問題意識

学生と地域の関係を
「一過性」で終わらせないためには？

- 学生にとって
- 地域にとって

無理のない**持続的な関わり方**とは？

活動を通して感じている課題感



**AWAJISHIMA
QUEST COLLEGE**
淡路島クエストカレッジ

- 2023年に立ち上げ
- **洲本市が10年間築いてきた域学連携のステップアップを見据え、民間組織に運営を委託する目的**で発足



 Sumoto Mokushojuku
洲本木匠塾

- 2024年に立ち上げ
- 岐阜県加子母で30年続く「木匠塾」の知見を地域へ広げ、地域と地域をつなぐプロジェクトとして発足



関わっている2つの域学連携の取り組み



**AWAJISHIMA
QUEST COLLEGE**
淡路島クエストカレッジ

- 大学プロジェクト型
- 民間組織が運営
- 役割は都度変わる
- 短期 / 参加の間口が広い



- 学生主体型
- 個人が受け入れ
- 地域での役割が明確
- 1年を通した密な活動

	 <p>AWAJISHIMA QUEST COLLEGE 淡路島クエストカレッジ</p>	 <p>Sumoto Makushojuku 洲本木工塾</p>
枠組み	大学プロジェクト型	学生主体型
受け入れ主体	民間組織 (株式会社シマトワークス・元協力隊・ 地域活性化起業人)	個人 (地域交流拠点HOOK)
参加形態	大学単位+一部一般募集 さまざまな大学・学部	関西圏を中心に全国8大学 建築学部生
内容	地域資源・企業課題 テーマは都度変化	伝統工法を用いた木造建築の 設計・加工・施工
規模	<ul style="list-style-type: none"> ・2~3ヶ月のうち10日 / 20~30人程度 ・日帰り / 50人 <p>→年計4回 / 年間延べ120人ほど</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・月1回活動 + 年2回の合宿 <p>→年間約30人・延べ100人ほど</p>

2つの取り組みの特徴（詳細）

それぞれが持っている価値と課題



**AWAJISHIMA
QUEST COLLEGE**
淡路島クエストカレッジ



価値

- 地域に関わる入口
- 多様な学生が参加しやすい
- 主体的に考え、動く経験
- 深い関係が生まれやすい、
継続性が高い

課題

- 一過性になりやすい
- 地域側の労力負荷が高い

学生の 関わり方の違い

		 <p>AWAJISHIMA QUEST COLLEGE 淡路島クエストカレッジ</p>	 <p>洲本木行塾 Sumoto Mokushojuku</p>
		大学プロジェクト型	学生団体型
まとめると	👉 間口が広く参加しやすいが、関係の継続性は制度設計に左右されやすい		
良い点	<ul style="list-style-type: none"> ● テーマ・期間・ゴールが決まっているため、学生が参加しやすい（参加ハードルが低い） ● 単位やカリキュラムに紐づいていることが多い ● 先生が伴走する場合もあり、より安定して活動しやすい ● ゼミ単位だと年を超えた継続も起きうる ● 交通費と宿泊場所の負担なし（洲本市が負担、上限あり） 		<ul style="list-style-type: none"> ● 学生間で引継ぎや次世代育成を主体的に行う文化が根付いている ● やりたいことと地域に関わる動機が明確 ● 交通費と宿泊場所の負担なし（洲本市が負担、上限あり）
見えてきた課題	<ul style="list-style-type: none"> ● 学生の取り組み姿勢が受動的になりやすく、活動の枠を超えた人と人の関係性が作りにくい ● 活動期間を終えるとともに関係が終わり、地域との関わりが一過性になりやすい 		<ul style="list-style-type: none"> ● 学生自身が、取り組むテーマやゴールを自分たちで決めたいという意識が強く、 <ul style="list-style-type: none"> ・ 活動前に地域を知る時間や対話が必要 ・ テーマ設定までに時間がかかる ● 密な活動のため、活動と学業との両立が難しい学生も一部いる

地域の 関わり方の違い

		AWAJISHIMA QUEST COLLEGE 淡路島クエストカレッジ	Sumoto Mokushojuku 洲本市行塾
まとめると	👉 比較的設計しやすいが、継続的な運営が非常に難しい		👉 活動規模が大きくなるほど、地域側の労力・コストが増えていく
良い点	<ul style="list-style-type: none"> 民間組織が受け入れ主体のため、組織形態が柔軟。教育やプログラム設計に専門性のある人材が関わっている 枠組みがあるため受け入れ設計しやすい <ul style="list-style-type: none"> 期間・人数・活動内容が事前にある程度決まる 運営側のスケジュールが立てやすい 洲本市のバックアップがあるため、地域との連携が図りやすい 	<ul style="list-style-type: none"> 学生側の主体性が高く、地域に対する当事者意識が強いため、信頼関係を築きやすく、活動終了後も関係が継続している 活動内容が具体的で、地域にとってわかりやすい 洲本市のバックアップがあるため、地域との連携が図りやすい 	
見えてきた課題	<ul style="list-style-type: none"> 民間組織として自走が難しい <ul style="list-style-type: none"> 自治体が受け入れ費用を負担するケースが多く、大学側が「費用を出して地域に関わる」構造になりにくい 学生受け入れそのものが収益になりにくい 中間支援としての調整・伴走・設計の入件費が制度上、明確に位置付けられていない、 現状、外部支援なしでは継続が非常に難しい 	<ul style="list-style-type: none"> 関わる時間・労力が大きい <ul style="list-style-type: none"> 月1回の来島、年2回の長期合宿 月2回程度の打ち合わせ 活動前と活動外のサポートが必要 <ul style="list-style-type: none"> 地域との橋渡し 生活面のトラブル 運営側の入件費が制度上評価されない <ul style="list-style-type: none"> 補助金は学生活動費のみ対象 調整、伴走、運営の労働時間は自己負担 実情としてほぼボランティア 	



大学プロジェクト型の可能性

工夫

- ・ 一般募集型
- ・ 1年間関わるインターン型 3名



結果

- ・ 就活中でも
- ・ 洲本が好きで
- ・ 地域に関わることにやりがいを感じている

👉大学プロジェクト型も、**設計次第で継続性は生まれると実感**

共通して見えてきたこと

共通して見えてきたこと

- ・ どちらの取り組みも学生は意欲的に関わっている
- ・ 学生が主体的に関わるほど、地域との関係は深まり継続しやすくなる

その分必要になるのが

学生の主体性が高まるほど

調整

伴走

フォロー

学生と地域をつなぐ中間的な支えが必要不可欠

共通して見えてきたこと

淡路島クエストカレッジの運営実態



- ・ 民間組織として運営
- ・ 専門性を活かせる一方、**「自走＝売上」が必要**
- ・ 協力隊・起業人・補助金など洲本市のバックアップを受けながら自走する方法を模索してきた
- ・ しかし大学側の予算がつきづらい、参加費でも収益が合わない
- ・ **11月の起業人任期終了を目の前に、現在も持続可能な事業のあり方を模索**しているが、構造的な課題が解決しきれていない

洲本木匠塾の運営実態



- 売上を立てる必要はない一方で、**調整・伴走・打ち合わせ対応など運営にかかる時間と労力は受け入れ側に集中**している
- 洲本市の補助金でバックアップを受けているが、学生活動に直接かかる費用のみに限られている
- 受け入れ側の**労力・時間といったコストの持ち出しが発生**している
- 今後、活動の規模が広がるほど、受け入れ側の負担も増えていく構造

👉形は違うが、どちらも「中間的な運営コスト」を前提にしないと続かない

制度設計について

- 学生と地域をつなぐ中で発生している中間支援的な役割の立ち位置の整理
- 地域側で発生している可視化しにくいコストを制度内でどう位置付けるか
- 単年度ではなく関係性を継続してつくる仕組み

大学について

- 大学側には制度・予算・評価の制約があると伺っている
- 一方で学生の関わり方次第で、地域側の支え方も変わる
- 学生の主体性を前提としながら、関わり方の設計を地域の受け入れ側と一緒に検討していきたい

無理なく続く域学連携のために

一番は、学生がのびのびと意欲的に地域に関わり、
地域側も活動を支えられる土台があるという状態です。

本日の話は、あくまで一つの現場で感じている実感です。
十分に整理しきれていない点や、
議論を深める必要のある点もあると思います。
その一端として、少しでも今後の議論の参考になれば幸いです。

おわりに